

歴史家がやっていること、やっていると思われていること

松沢裕作
(慶應義塾大学)

はじめに

- ・歴史学は危機なのか
- ・危機なのはどの歴史学なのか
- ・歴史学は一つなのか
- ・結局、歴史家は何をやっているのか : 「問題意識」「史料批判」「実証」「客観的」といった語の多義性。

★2、3の内容は、9月刊行予定の拙著『歴史家はなにをやっているのか』(仮)の一部要約。

1 歴史家がやっていると思われていること — 歴史新書の紹介文から

- ・別紙 2021年1月～9月刊行の歴史系新書の紹介文
- ・内容紹要約(／以前の部分) + 「位置づけ」というスタイルが定型
- ・「位置づけ」部分で頻出する定型と常套句(()内は複数回登場)

① 「～評される」「見られがち」「とされる」「だが」(3)「定着していった。しかし」「イデオロギーにとらわれることなく」「イメージが流布しているが」「考えられていた」／「真意」「新知見」「実像」(6)「知られざる」「新たな角度から描き出し」「正確に」「実際にはどんなものだったのか」「古代史像を刷新」—「大きく塗り替えられている」「研究の最前線」「最新の史資料」「最新成果を結集」(2)「最新の研究状況を紹介」「画期的な成果」「全貌と内幕」「実態」「内実」

……従来の歴史像があり、それを書き換える(史料・事実に重点を置く場合—研究の更新を強調する場合)

- ② 「今なお影響を与え続ける」「今日まで働き続けてきた」
……主題が現在につながるものであることを強調する
- ③ 「文献を博搜した著者」「第一線の研究者」「気鋭の歴史研究者」
……優れた歴史研究者であるという著者の属性を強調する。

④ その他

「決定版」／「通史」／「謎を解明する」／「歴史の教訓」

- ・わかったこと：

新書は、1) 従来はこういうイメージでしたが(場合によっては、「悪しきイデオロギー」の影響さえ言及される)、2) 新しい史料の分析や、新しいものの見方によると、3) 最新の研究では別の「実像」が浮かび上がってきました(総じて「実像」が多用されすぎである)

という形で売られることが多い。

- ・これは、歴史学者の自己認識と一致していないわけではない

「歴史学を学ぶことにより、過去と現在を、そして自分自身をきちんとした根拠(史料や各種のデータ)をもとに論理的に考えてゆく訓練を行うことになるだろう。」(津野田興一「高校の歴史から大学の歴史へ」、『わかる・身につく歴史学の学び方』大月書店、2016年、所収)

「新しい史料を見つけたり、すでに知られた史料に新たな解釈をほどこすには、人とは異なる視点(モノの見方、考え方)をもつ必要がある。……では人と異なる視点は、どうすれば得られるのであろうか。それには、定説を疑う姿勢、換言すれば常識を疑う姿勢が不可欠である。」(志賀美和子「視点を変え通説を疑うことから始める歴史学」、同上書所収)

- ・歴史家は、ほんとうに、そういうことをやっているのか？

2 歴史学と日常生活

- ・パブリック・ヒストリー？

「パブリック・ヒストリーとは、狭義には歴史学の分野で何らかの訓練を受けた人びとが、大学の研究室や教室といった専門的で学術的な場の「外」の社会へと飛び出して、そこで歴史学の知見や技能、そして思想を活かす幅広い実践を意味する。」(菅豊「パブリック・ヒストリー —現代社会において歴史学が向かう一つの方向性」、菅豊・北条勝貴編『パブリック・ヒストリー入門』勉誠出版、2019年)

博物館、メディアコンテンツ、ファミリーヒストリーetc.

- ・そもそも人間は日常生活において過去を語る。

- ・歴史学の論文←史料

例)「山田という人物が、1900年10月10日にぼんやり村に5ヘクタールの土地を買った」←山田がぼんやり村に5ヘクタールの土地を買った際の証文(根拠としての史料)

- ・日常生活 特に根拠が用いられない場合。

例)「山田、ぼんやり村に土地買ったって」「へー」「金持ちなんだね」「そうだね」

- ・日常生活 なにか根拠が必要な場合。

例) ある不動産仲介業者の事務所のなかで

部下「山田さんはぼんやり村の5ヘクタールの土地を買うことを決めました」

上司「よかったね」……では終わらない。

→「山田がぼんやり村に5ヘクタールの土地を買った」という出来事を、時間が経った後も示すことができる、根拠となる書類が残される。

- ・ どうして歴史学の論文では史料が必要となるのか？
 - ・ 「山田という人物が、1900年10月10日にぼんやり村に5ヘクタールの土地を買った」は、単体では論文にはならない。
 - ・ 歴史家が以下の3つの文章をつなげて書いた場合はどうか？
- ①山田という人物は、1900年10月10日に、ぼんやり村に5ヘクタールの土地を買った。
 - ②1900年時点のぼんやり村に土地を持っていた100人のうち、1ヘクタール以上の土地を持っているものは5人しかいなかった。
 - ③したがって、山田は、ぼんやり村のなかでは、広い土地を持っているグループに属している。

→それは本当か？という突っ込みを入れる余地が生じる。

- ・ なぜ突っ込み入れる余地が生じるか→①、②が③を言うために「使われている」から。
- ・ 過去の事実・状態を、別の何かのために使うときに、突っ込みが入る余地が生じ、それをディフェンスするための根拠が必要となる（土地売買をめぐる訴訟が起こることを防ぐために根拠としての契約書が必要になる）。
- ・ 歴史家は、過去の誰かが、のちのちのために作った何かを、作成者の目的外に転用し、史料として使う。

例) 中世日本の公家の日記：儀式・先例の伝達（尾上陽介『日本史リブレット 30、中世の日記の世界』、山川出版社、2003年）

- ・ 過去について何か言うという日常の実践→その一部に根拠を必要とする実践がある→その一部に歴史学がある。
- ・ 過去について何か言う実践という海に浮く小島のようなものとしての歴史学
- ・ それでは、歴史家が史料を読むときは実際にはどのように読んでいるのか？

3 歴史学の論文では史料はどのように読まれているか

- ・ 「史料批判が大事」……しかし、史料批判ができるためには、まず史料が読めなければならない。
 - ・ 拙稿「逋信省における女性の雇員と判任官 —1900年～1918年—」（『国立歴史民俗博物館研究報告』235、2022年）の自己分析
 - ・ どんな論文か？
- 20世紀初期の、日本の逋信省、とりわけ郵便貯金を扱う部局のなかで、女性の職員が働いていたということ。かなりの女性が、「判任官」という、下級の官吏という身分を持つ

ていたこと ←官吏は原則として男性

・論文断片の検討 前置き+史料引用+敷衍というセット。

=====

1 1906 (明治 39) 年 4 月 12 日、通信次官仲小路廉は、内閣書記官長石渡敏一に対して次のような①照会を送った (27)。

2 郵便為替貯金管理所及各郵便局等に於て女子を雇員に採用せし以来の経歴に徴するに、②其成績頗る良好にして、之をして服務せしむる事務の範囲も倍々拡大するの現況に有之候処、斯く女子雇員の増加と執務範囲の拡張とに伴ひ、②自今之を監督せしむべき者及責任ある事務を執らしむべき者を判任官に登用し、之を奨励すると同時に、執務上に就き其責任を負はしむるに至らば、尚一層の好結果を獲らるべしと信じ候、右の如く女子雇員を判任官に登用するは③文官任用令其他関係の法規上より別段何等差支無之儀とは存候得共、為念御意見致承知度、此段及御照会候也

3 ②貯金部局および郵便局等における女性の雇員の業績は良好であり、これを判任官に登用して、監督者および「責任」ある事務を担わせたい、というのである。そして、③当該文書はそれについて法規上問題がないということを内閣書記官長に照会している。④照会が出されたということは、それは閣議請議をする必要のない案件であったということと、しかし確認を要する程度には先例のない措置であったことの両面を示している。

(28)「公文雑纂」明治三十九年・第三十八卷・通信省、国立公文書館所蔵、纂 01007100

=====

1 これから史料を引用することの予告と、引用する史料が何であるかの提示

2 の段落がその史料の引用

3 の段落が、いわゆる敷衍：史料の内容を、現代の読者に向けて報告している部分

・段落 1 ①「照会」「送った」；過去形で、断定的→注 (28)

史料は偽物ではない。国立公文書館は偽物ではない。「史料の伝来論」

・中身はともかく、照会を送ったこと自体は、それが照会であること自体によって確定される。

史料自体が、「問い合わせをしている」という史料なので、史料が偽物でないのであれば、史料の作成者が、史料の受け取り手に対して「問い合わせをした」ということ自体は疑いようがない →過去形で、断定可能。

・日本中世古文書学における「文書」=差出人から宛先に対して、何らかの意思を伝えるために作成された文献 (佐藤進一『新版 古文書学入門』法政大学出版会) ←→記録

・段落 2→段落 3

②→②'

史料中の内容を、現代文に直して要約して読者に提示している。文は「というのである」

という形で閉じられている。この一文の要約には、「通信省はどのように認識しているか」「その認識を根拠に通信省は何を求めているか」という二つの内容を含む。「というのである」という語尾は、前半の通信省の認識についてこの段階では判断を留保しつつ（本当に「成績良好」であったかはわからない）、しかし、それを根拠に女性の判任官登用を望んでいるということ自体は事実として確定できるという意味で使われている。

③→③' 「何を照会しているのか」を示している

④ここで初めて史料引用そのものから離れる。照会は「問い合わせ」であって、新たな法規の制定や予算措置を「要求」しているのではない。この区別は「照会」と「閣議請議」という、著者（および専門読者）が知っている別の文書形式との比較で当該文書が位置付けられる（閣議の請議は大臣名で提出される）。

- ・①～④までで、「A（この場合は、女性が判任官に登用すること）を通信省が欲しており、それは現行法規のもとで問題なくできる内閣書記官長に照会（問い合わせ）している」ことを確定したうえで、それを当時の政策決定プロセスに関わる一般的知識と組み合わせることで、「Aは当時の法規のもとで可能であるが、先例はなく、一応聞いてみる必要がある程度には異例の措置である」という位置づけを与えている。
- ・基本的なモードは、「史料」→「過去の現実」ではなく、「いまここにある史料の説明」。敷衍における現在形の多用。
- ・この史料が読むときに、どのような知識を用いているか。
 - 1) 語彙と文法
 - 2) この史料が含まれる史料群の性格
 - 3) 「照会」という形式が、どのような行為にあたるのか（別の行為であればどのような形式の史料が作られるかを）
 - 4) この史料が作成されるときに参照されている関係法規……以上のことを知っていれば、とりあえずこの史料は読める。
- ・この情報は、史料作成当時の人びとが知っていて、そのもとでこの史料が作成され、「照会」という実践を形作ったものでもある。かつそれは専門的知識である。

おわりに

- ・日常的な過去の振り返りと歴史家の歴史叙述の地続き性
- ・過去の人の知識と歴史家の知識の共通性
- ・史料のなかで何に注目し、どのような問いを立てて歴史叙述を作り上げるか→歴史学の多様性と独創性（逆に言えば、古い→新しいと一新されるわけではない／おなじものを見ても違うことは言えるが、同じものを見て違うことを言う幅には限界がある）
- ・過去は「普通に」使われる（契約書を交わした→故に私のものである）→「歴史認識」を

めぐる争い。

- ・自然科学的方法論の「標準化」への対応として、言語を扱う歴史学の方法論の明確化の必要性（井頭昌彦編著『質的研究アプローチの再検討』、勁草書房、2023年）
- ・不毛な「歴史認識論争」を回避する知恵としての、「まともな言葉の交わり方」の一手段としての歴史学

2021年1月～9月以降に刊行された、中公・岩波・ちくま各新書の「内容紹介」文

★出典は各社ウェブサイト

★講談社現代新書は、「まえがき」等から著者の文章をそのまま引いている場合が多いので取らなかった)

中公新書

清水唯一朗『原敬 「平民宰相」の虚像と実像』

初の「平民」首相として、本格的政党内閣を率いた原敬。戊辰戦争で敗れた盛岡藩出身の原は苦学を重ね、新聞記者を経て外務省入省、次官まで栄進する。その後、伊藤博文の政友会に参加、政治家の道を歩む。大正政変、米騒動など民意高揚の中、閣僚を経て党の看板として藩閥と時に敵対、時に妥協し改革を主導。首相就任後、未来を見据えた改革途上で凶刃に倒れた。／独裁的、権威的と評されるリアリスト原の軌跡とその真意を描く。

阿部拓児『アケメネス朝ペルシアー 史上初の世界帝国』

2500年前、アジア・アフリカ・ヨーロッパの三大陸にまたがる「史上初の世界帝国」として君臨したアケメネス朝ペルシア。エジプト侵攻やペルシア戦争など征服と領土拡大をくり返し、王はアフラマズダ神の代行者として地上世界の統治に努めた。古代オリエントで栄華を極めるも、アレクサンドロス大王によって滅ぼされ、220年の歴史は儚く幕を閉じた。／ダレイオス1世ら9人の王を軸に、大帝国の全貌と内幕を描き出す。

伊藤俊一『荘園 墾田永年私財法から応仁の乱まで』

荘園は日本の原風景である。公家や寺社、武家など支配層の私有農園をいい、奈良時代に始まる。平安後期から増大し、院政を行う上皇の権力の源となった。鎌倉時代以降、武士勢力に侵食されながらも存続し、応仁の乱後に終焉を迎えた。／私利私欲で土地を囲い込み、国の秩序を乱したと見られがちな荘園だが、農業生産力向上や貨幣流通の進展に寄与した面は見逃せない。新知見もふまえ、中世社会の根幹だった荘園制の実像に迫る。

藤尾慎一郎『日本の先史時代』 旧石器・縄文・弥生・古墳時代を読みなおす

日本史の教科書で最初に出てくる、旧石器・縄文・弥生・古墳時代。三万六〇〇〇年に及ぶ先史の時代区分は、明治から戦後にかけて「定着していった。しかし」近年、考古学の発展や新資料の発掘に伴い、「それぞれの時代の捉え方は大きく塗りかえられている」。本書では、各時代の「移行期」に焦点を当て、先史の「実像」を描き出す。人びとの定住、農耕の開始、祭祀、「都市」の出現、前方後円墳の成立——。「研究の最前線を一望する決定版」。

関幸彦『刀伊の入寇 平安時代、最大の対外危機』

藤原道長が栄華の絶頂にあった一〇一九年、対馬・壱岐と北九州沿岸が突如、外敵に襲われた。東アジアの秩序が揺らぐ状況下、中国東北部の女真族（刀伊）が海賊化し、朝鮮半島を経て日本に侵攻したのだ。道長の甥で大宰府在任の藤原隆家は、有力武者を統率して奮闘。刀伊を撃退するも死傷者・拉致被害者は多数に上った。／当時の軍制をふまえて、平安時代最大の対外危機を検証し、武士台頭以前の戦闘の「実態」を明らかにする。

鈴木由美『中先代の乱 北条時行、鎌倉幕府再興の夢』

鎌倉幕府滅亡から二年後の一三三五年、北条高時の遺児時行が信濃で挙兵。動揺する後醍醐天皇ら建武政権を尻目に進撃を続け、鎌倉を陥落させた。二十日ほど後、足利尊氏によって鎮圧されるも、この中先代の乱を契機に歴史は南北朝時代へと動き出す——。／本書は、同時代に起きた各地の北条氏残党による蜂起や陰謀も踏まえ、乱の「内実」を読み解く。また、その後の時行たちの動向も追い、時流に抗い続けた人々の軌跡を描く。

萩原淳『平沼騏一郎 検事総長、首相からA級戦犯へ』

司法と行政の頂点を極めた唯一の政治家・平沼騏一郎。東大を首席で卒業後、能吏の聞こえ高く、大逆事件を処理し、検事総長、大審院長を歴任。政界進出を目論み右翼団体・国本社を組織する。軍人らの期待を集め、日中戦争下、首相に就任。日米開戦後は重臣、枢密院議長として和平派へ。機会主義と映る行動から右翼に銃撃され、自宅放火にも遭った。／天皇崇拜の国家主義者、陰謀家、A級戦犯として断罪され続けた平沼の「実像」を描く。

仁藤敦史『藤原仲麻呂 古代王権を動かした異能の政治家』

古代王権が安定した奈良時代に現れた異能の権力者・藤原仲麻呂。叔母・光明皇后の寵愛の下、橘奈良麻呂の変などで兄や他氏を粛清し実権を掌握。中国への憧憬から官職名をすべて唐風に改め、藤原氏嫡系に「恵美」姓を賜り准皇族化を推進、自ら恵美押勝と名乗った。養老律令の施行、新羅への外征計画を進める中、怪僧道鏡を慕う孝謙上皇と対立。武装蜂起を試みるが敗死する。息子らを「親王」と呼ばせ、皇位篡奪をも目論んだ生涯。／

小関隆『イギリス 1960年代 ビートルズからサッチャーへ』

第2次世界大戦後のベビーブームを背景に、若者文化が花開いた1960年代。中心にはビートルズが存在し、彼らの音楽・言動は世界に大きな衝撃を与えた。他方、サッチャー流の新自由主義も実はこの時代に胚胎した。[今なお影響を与え続ける]若者文化と新自由主義の象徴は、なぜイギリスで生まれたか——。本書は、ファッション、アートなどの百花繚乱、激動の社会とその反動を紹介し、1960s Britainの全貌を描く。

和田裕弘『天正伊賀の乱 信長を本気にさせた伊賀衆の意地』

三重県西部の伊賀市・名張市エリアはかつて伊賀国と呼ばれた。戦国時代、この小国は統治者がおらず、在地領主たちが割拠していた。一五七九年、織田信長の次男信雄は独断でこの地に侵攻。挙国体制で迎え撃った伊賀衆は地の利を生かして巧みに抗戦し、信雄は惨敗を喫した。信長から厳しく叱責された信雄は翌々年、大軍勢を率いて再び襲いかかる——。[文献を博搜した著者]が、強大な外敵と伊賀衆が繰り広げた攻防を描く。

熊本史雄『幣原喜重郎 国際協調の外政家から占領期の首相へ』

戦前に外相を4度務め、経済重視の国際協調を主導、戦後は占領下、首相として日本国憲法制定に尽力した幣原喜重郎。外交官の中樞を歩み、欧米との関係を重視した「幣原外交」は、軟弱と批判されながらも中国への不干渉を貫き、政党政治を支えた。満洲事変後の軍部台頭に引退を余儀なくされるが敗戦後、昭和天皇に請われ復活。民主化や憲法9条の成立に深く関与する。／激動の昭和期、平和を希求し続けた政治家の[実像]に迫る。

虎尾達哉『古代日本の官僚 天皇に仕えた怠惰な面々』

壬申の乱の勝者である天武天皇以降の日本は、律令に基づく専制君主国家[とされる。だが]貴族たち上級官僚とは異なり、下級官僚は職務に忠実とは言えず、勤勉でもなかった。朝廷の重要な儀式すら無断欠席し、日常の職務をしばしば放棄した。なぜ政府は寛大な措置に徹したのか。その背後にあった現実主義とは。飛鳥・奈良時代から平安時代にかけて、下級官僚たちの勤務実態を具体的に検証し、古代国家の知られざる[実像]に迫る。

小島庸平『サラ金の歴史 消費者金融と日本社会』

個人への少額の融資を行ってきたサラ金や消費者金融は、多くのテレビCMや屋外看板で広く知られる。戦前の素人高利貸から質屋、団地金融などを経て変化した業界は、経済成長や金融技術の革新で躍進した。[だが]、バブル崩壊後、多重債務者や苛烈な取り立てによる社会問題化に追い詰められていく。本書は、この一世紀に及ぶ軌跡を追う。家計やジェンダー

など多様な視点から、**知られざる**日本経済史を描く意欲作。

岩波新書

芝健介『ヒトラー 虚像の独裁者』

ヒトラー（一八八九—一九四五）とは何者だったのか。ナチス・ドイツを多角的に研究してきた第一人者が、**最新の史資料**を踏まえて「ヒトラー神話」を解き明かす。生い立ちからホロコーストへと至る時代背景から、死後の歴史修正主義や再生産される「ヒトラー現象」までを視野に入れ、現代史を総合的に捉え直す**決定版**評伝。

立石博高『スペイン史 10 講』

キリスト教勢力とイスラーム勢力とが対峙・共存した中世、「太陽の沈まぬ帝国」を築きあげた近世——ヨーロッパとアフリカ、地中海と大西洋という四つの世界が出会う場として、独特な歩みを刻してきたスペイン。芸術・文化・宗教や、多様な地域性に由来する複合的国家形成にも着目して、個性あふれる**その通史**を描く。

木宮正史『日韓関係史』

日韓関係は、なぜここまで悪化してしまったのか。交流が増えるにつれて、日韓の相互理解は進むはずではなかったのか。——**その謎を解明するため**、本書は一九四五年から現在に至る歴史を、北朝鮮・中国など国際環境の変容も視野にいれながら、徹底分析する。一つの生命体のように変化を遂げる日韓関係の履歴と未来とは。

古田元夫『東南アジア史 10 講』

ASEAN による統合の深化、民主化の進展と葛藤。日本とも関わりの深いこの地域は、歴史的にさまざまな試練を経ながらも、近年ますます存在感を高めている。**最新の研究成果にもとづき**、世界史との連関もふまえつつ、多様な民族・文化が往来し東西世界の要となってきた東南アジアの通史を学ぶ。「歴史 10 講」シリーズ第五弾。

金澤周作『チャリティの帝国』

イギリス独自の重層的なセーフティネットの中で、社会の「錨」のように**今日まで**働き続けてきたチャリティ。自由主義の時代から、帝国主義と二度の大戦をへて、現代へ。「弱者を助けることは善い」という人びとの感情の発露と、それが長い歴史のなかでイギリスにもたらした個性を、様々な実践のなかに探る。

小関悠一郎『上杉鷹山—「富国安民」の政治』

半世紀に及ぶ粘り強い取り組みによって、窮乏する米沢藩を立て直した上杉鷹山（一七五一—

～一八二二)。江戸時代屈指の「明君」として知られる彼が目指したのは、何のため、誰のための政治だったのか。改革を担った家臣たちの思想と行動、また鷹山明君像の形成を「新たな角度から描き出し」、その改革を日本の歴史に位置づける。

ちくま新書

筒井清忠編『大正史講義【文化篇】』

大正時代の日本は、さまざまな外来の文物を貪欲に受け入れ、豊かな社会の到来もあって新たな思想や価値観、生活スタイルや芸術文化を生み出した。労働運動がさかんになり、デモクラシーへの要求が強まるとともにナショナリズムも勃興する。教養主義が成立し、女性の地位が変わり始めるなか、大衆社会化によって多様な消費文化が生まれていった。百花繚乱ともいえるこの時代の文化を、「二五人の研究者による最新成果を結集して、イデオロギーにとらわれることなく、正確に描き出す」。

横山和輝『日本金融百年史』

はじまりは、株式市場でどの銘柄も軒並み暴落した一九二〇年。その後、関東大震災、昭和恐慌に直面し、戦争へと突き進む中、日本の株式市場、金融システムは様々な政策のもと、揺れ動いていくことになる。戦後復興、高度成長、バブル、「失われた三〇年」といまま続く流れはどのように導かれていったのか。経済・金融政策と人々の思惑はいかに影響を与え合うのか。「歴史の教訓」を見誤らないためにこの百年を振り返る。

筒井清忠『大正史講義』

わずか一五年間の大正時代にはロシア革命、第一次世界大戦、関東大震災など内外に大きな出来事が生じ、日本の社会も大きな変化を余儀なくされた。そしてその変化とともに大衆が登場して政治を動かし、「劇場型政治」が展開していく。この激動の昭和の原点ともいえる複雑な時代をどう見るべきか。その歴史を見るための視座を提供すべく、「二三名の第一線の研究者が最新の研究成果を結集」。二六の論点によって、大正時代を正面から描きなおす、「まったく新しい」大正史入門決定版

畑中章宏『廃仏毀釈 一寺院・仏像破壊の真実』

明治政府の神道国教化により起こった廃仏毀釈。それは、日本で長らく共存していた神道と仏教を分離し、仏教を排斥する運動だった。この出来事は寺院や仏像の破壊など民衆の熱狂による蛮行という「イメージが流布しているが」、「実際にはどんなものだったのか」？信仰の対象であったものを破壊するのに、人々にためらいはなかったのか？神仏が共存していた時代から説き起こし、各地の記録から丁寧にこの出来事の実際を読みとく

佐藤信『古代史講義【氏族篇】』

古代日本をつくった氏族は、いつ歴史の舞台に登場し、その後どのように歩んだのか。大伴氏、物部氏、蘇我氏、阿倍氏から、藤原氏、橘氏、佐伯氏、紀氏、東漢氏、西文氏、菅原氏、源氏、平氏、そして奥州藤原氏に至るまで—各時期に活躍した代表的氏族を取り上げるとともに、通時的な歴史の展開をも見通したい。単に各氏族の事典的な解説にとどまらず、最新の研究状況を紹介しながら、時代背景としての古代社会の姿を明らかにしていく。ハンディながら古代史像を刷新する一書。

尾脇秀和『氏名の誕生 —江戸時代の名前はなぜ消えたのか』

私たちが使う「氏名」の形は昔からの伝統だと思われがちだが、約一五〇年前、明治新政府によって創出されたものだ。その背景には幕府と朝廷との人名をめぐる認識の齟齬があった。江戸時代、人名には身分を表示する役割があったが、王政復古を機に予期せぬ形で大混乱の末に破綻。さらに新政府による場当たりの対応の果てに「氏名」が生まれ、それは国民管理のための道具へと変貌していく。／気鋭の歴史研究者が、「氏名」誕生の歴史から、近世・近代移行期の実像を活写する。

義江明子『女帝の古代王権史』

卑弥呼、推古、持統…、古代の女性統治者／女帝はどのような存在だったのか。かつては「中つぎ」に過ぎないと考えられていたが、この四半世紀に研究が大きく進み、皇位継承は女系と男系の双方を含む「双系」的にもものだったことがわかった。七世紀まで、天皇には女系の要素も組み込まれていたのだ。古代王権史の流れを一望し、日本人の女帝像、ひいては男系の万世一系という天皇像を完全に書き換える、第一人者による決定版。

秋田 茂・細川道久『駒形丸事件 —インド太平洋世界とイギリス帝国』

一九一四年にカナダ・バンクーバーで起きた「駒形丸事件」。インド人移民の上陸が拒否され、多数の死者をコルカタで出した悲劇である。日本ではほとんど知られていない「駒形丸事件」であるが、この小さな事件を通して歴史を眺めると、ミクロな地域史からグローバルな世界史までを総合的に展望できる。移民史・政治史・経済史を融合させることで、インド太平洋からの新しい世界史像を提示するグローバルヒストリーの画期的な成果